

「…よし、取った枠の配信予定をツイートして…と。
あとは夜まで切り抜きの確認かな」

藍原悠斗（あいはらゆうと）は、一段落した作業に軽く伸びをして、椅子から降りて軽く歩き回った。

最近の運動不足は深刻なのだ。トレーニングマシンを置けるほど部屋は広くないし、引っ越せるほどは稼げていない。

しかも、ほとんどの日用品をネット通販で買い込んでいる。ちょうど今日も、飲み水にしているミネラルウォーターがケースで届く予定だった。

チャイムが鳴ったのでモニターを見ると、宅配便の制服を着た遅い配達員が立っている。いつもの担当の人だ。

玄関を開けると、高身長の爽やかそうな男がぱっと笑った。

「こんにちは、お荷物です！今日はちょっと重いですが、どこに置きましょうか？」

よく日に焼け、血管の浮き出た遅い腕には段ボール。重い水の入ったケースを、重ねて2つも持っている。

相変わらずすごい筋肉だ。思わず見惚れてしまう。

身長も体重も平均、上司のパワハラに耐えかねて、適応障害で会社勤めを辞めて配信で食べている悠斗には、このいかにも澆刺とした男性はあまりに眩しく見える。

帽子の下の黒髪短髪も、キリッとした眉も、凛々しくて男らしい。年齢は同じくらいだろうか…。

「藍原さん？」

「あ、すいません！その、足元で大丈夫です」

「でもかなり重いですよ？良ければ中までお入れしますが」

「えっと、じゃあ、お願いします…」

思わずぼんやり見つめてしまっていた。ハキハキと受け答えしながら軽々と箱を玄関内の廊下に置く背中を眺める。制服の上からでも見えるほどしなやかな背筋がすごい。

「じゃあハンコかサインお願いしますね」

パッと振り向いた距離が、思ったより近くて驚いた。ふわりと汗と制汗剤の爽やかな匂いが香る。

「っと、すいません」

「わ」

狭い玄関でぶつかりそうになった悠斗を、咄嗟に軽く支えてくれる。すごい。がっしりとした腕が頼もしい。

なぜかそのままの体勢でハンコを押させられ、男は爽やかに帽子を直してありがとうございます！と笑って配達に戻っていった。

白い歯が眩しい…。

(なんだか、あの人見ると自分が情けなくなるなあ)

真っ直ぐで自信のありそうな笑顔だ。男として憧れるような気持ちと、悔しい気持ち。でも、あの腕に支えられたときは、その逞しさにドキッとしてしまった。

ここ数年あまりにリアルで人と接しなすぎて、ただの配達員との接触で動揺するなんてあまりに寂しすぎる。

「あーやめやめ。作業しよ！」

気持ちを切り替えて作業をするが、動画の中で、自分の声で喋っている青い髪をした、自分よりもずっと精悍な雰囲気キャラクターを見ると、やっぱり少し心が重くなった。

(きっと『夜歌アルト』の中身だって、ああいう人だったら皆の理想どおりなんだろうなあ…)

悠斗の今の仕事はこのキャラクターに魂を吹き込むこと。つまり、いわゆるVR配信者というやつだった。

「じゃあ今日もやってきまーす！あ、スパチャありがとー！」

適当に選んだコメントを読みながらしゃべるのが悠斗の配信スタイル。

拾われる可能性があるコメントが増えるし、それ目当てのスパチャも来る。とは言え悠斗はスパチャ目当てというより、話題を広げるのが楽になるし、コメント欄が賑わってた方が安心するから読むタイプだった。

「SUNAさんいつも無言赤スパありがとー。富豪…！姫ゴリラさんお久しぶり～『野良の人上手すぎスパダリか？』いやほんと思った、この人すごく上手いよね？めちゃくちゃ守ってくれてるし。そっかこれがスパダリってやつか～」

ペラペラと喋りながらゲームを操作する。冴えない元平社員の本人と違って『夜歌アルト』というキャラは、前向きで適当で思ったまま喋り、ゲーム内でのトラブルも荒らしコメントも気にしないキャラだ。

「赤まんぼうさん、スパチャありがとー！ええと『ときめきますよね、私はマッチョな人が好きです』守ってもらえる頼もしさあるよね～そう言えばオレも最近さ、めちゃくちゃかっこよくて逞しい人にぶつかりかけて抱き止められるという、恋愛ゲームにしか存在しないイベントがあつて。いやいや、あつたの本当に。なんか、ドキドキしちゃったよね。え？いや男だよ！」

チャット欄が盛り上がる。こういう話題は彼女疑惑を持たれずちょっと色気を出せるのだ。

「あんなにムキムキイケメンだと、さすがのオレも、はわわあ…女の子になっちゃいますう…みたいな…？あっ雌声とか言うのやめてねBAN怖いから。これはね、乙女ボイス！あっSUNAさん今日2度目の無言赤スパありがと！…このタイミングで…？乙女ボイスが、刺さっちゃったのお…？」

今夜も、ケラケラ笑いながら喋り続ける。このキャラでいるときだけは、本当に明るい人間になれる気がした。

一週間後。米が切れそうなのでまた通販を利用した。配達希望時間もいつもと同じ。

午前はいつも通りメールやSNSのチェックをして、
昼食の後ひと段落した頃にチャイムが鳴る。

「こんにちは、お荷物です！」

相変わらず爽やかな笑顔。やっぱりカッコいい。

この人は、自分もこうなりたいなーという理想なのかもしれない、と思う。

「お米なんですそれ。重くてすみません」

「全然ですよ！中まで運びますね」

「お願いします。いつもありがとうございます。その、筋肉すごいですよね…」

米を持つ腕は血管が浮いてて遅しく、なんだか思わず腕を見ながらポロッと漏らしてしまった。すると。

「ありがとうございます！仕事で重いものばかり運んでますからね。あはは、ときめきましたか？」

「え！？」

爽やかなムキムキ配達員は、ニコニコと明るく笑いながらそう言うと、少し目を細めた。

「"女の子になっちゃいます？"」

「っ、あ……」

さーっと血の気が引いた。それは、まさに先日悠斗が配信でネタにした内容だ。この配達員に、この廊下で、抱き止められた日の夜に。

「え、と、あの、その…」

「実は前から、声が似てるなーって思ってたんですよ。でもあの配信で確信して…アレって、俺のことですよ？」

「……………」

青ざめて俯く。声で身バレは、まあいつかあるかもしれないとは思ってたけど。

こんな爽やかなスポーツマンみたいな男がリスナーだなんて思わないじゃないか。『夜歌アルト』のリスナーは、ほとんど女性なのに。

「驚かせましたか？結構昔からファンだったんです。配達の運転中も、いつもアーカイブ聞いてるんですよ」

「そ、そうでしたか…いや、まさか、リスナーさんだったとは…その、男性Vって、男の人はあまり興味ないもんかと、勝手に…」

「確かに、貴方以外の配信は興味ないので他の方の配信は見てないですね。俺は貴方の声が好きなんで」

「へ、へあ」

頭が追いつかない。

「……貴方の声を聞いてると、俺は"男の子になっちゃう"んですよね」

なんだそれどう言う意味。怖い。

というか、つまりは本人に聞かれてるのに、男に抱き止められてはわわした～！とかトークしちゃったのか、と自覚する。

「かっこよくて逞しい人に抱き止められたって、言ってくれましたよね。あれ、嬉しくて。配達の運転中じゃなかったら、何も考えずにここに来てたかも…」

ぐっ！と逞しい腕に抱き寄せられた。悠斗だって平均くらいの身長体重のはずなのに、この精悍な高身長の筋肉質の前では女みたいなものだ。

あの逞しい腕が自分を捕まえて、拘束している。

太い腿がぐっと足の上に差し込まれ、身長差に任せて股間を押し上げた。

「は、放してください…！」

男なのに股を割られる感覚が、未知でゾクゾクした。内腿に硬い男の足が当たるのが怖くて違和感で、足を閉じようと力を入れると、その腿をきゅっ♡と

挟んでしまう。

「あは、アルトさんは人懐こくて、明るくて元気だけど、貴方は控えめな方なんですね。だから確信が持てなかったんですが、そんなギャップにも興奮するなあ」

「んんっ…！？」

引き寄せられて、まるで当たり前みたいに唇を塞がれる。最初から舌を突っ込まれて、口の中をじゅぷじゅぷと漁られる深すぎるキスに、目を白黒させた。

「む、んっ、やっ」

「アルトさん、アルトさん、あ一本物だ、すごい、夢みたいです」

ちゅ、ちゅ、むちゅ…♡

熱く繰り返しながら、むしゃぶりつくように首筋や耳を吸われる。恋人みたいなねちっこい愛撫だ。片腕で抱きこまれるだけで全く抜け出せないほど力強い。

「や、やめろっ！け、警察呼びます、会社に訴える！」

「うわあ、その声でそんなの言われたら、流石にチンコ勃ちますね」

「ひっ…！？」

グッと押しつけられた股間に硬いものを感じて慄いた。じたばた暴れるが、男の腕はビクともしない。それはそうだ、まず身長からして差があるし、その筋力で重いものを軽々運ぶのをいつも見ている。

「っいや、やめ、やめろっ…」

「女の子になっちゃう～って、言ってくれないんですか？」

男は腰をぐっ♡ぐっ♡と救い上げるように突き出し、服の下でガチガチになっている勃起チンポを押し当ててきた。

その動きはいかにもセックス過ぎた。しかも、チンポがデカくて硬い。本当にガチガチのバキバキだ。

「は一、すごいな、本当にアルトさんが腕の中にいる。お尻、小さくて薄いですね。ココに俺の入れたらブツ壊しちゃいそう…♡」

その言葉に、目の前が真っ暗になった。本当に、今からこの人に犯されるんだ…。

自宅の玄関で、制服着た配達員に、ガチガチチンポ入れられてしまうなんて、そんな嘘みたいなことあるのか。

「やだ、やだやだやだっ」

部屋着のスウェットを下着ごとずり下ろされ、パチンとキャップを開ける音がして、ぬるりと何かを塗りつけられる。ハンドクリームのような容器の中身を割れ目に絞り出しているっばい。

「やめてくれ…本当にやめて…」

「ちゃんと潤滑剤ですから大丈夫ですよ。変なものじゃないですから安心してくださいね」

レイプへの恐怖にひたすら震える悠斗に男は見当はずれなことを言って、ぬるり♡とその長い指を挿入した。

「ヒッ…！！」

ぬるっ♡ぬるっ♡ぬるっ♡

ぬるっ♡ぬるっ♡ぬるっ♡

スムーズに出入りする指。あの節の太い男らしい指が、中に入っている。

よくヌメる何かのせいであっという間に指は二本に増えて、激しくそこを犯し始めた。

ヌッチュ♡ヌッチュ♡ヌッチュ♡ヌッチュ♡

ヌチュヌチュヌチュヌチュ♡！！

ヌチュヌチュヌチュヌチュ♡！！

「あっあっあっあっ！！あっあっあっあっ！！」

その、力強いエグい手マンにびっくりして、ビクッ♡ビクッ♡と震え、自分を拘束している男の腕にすがってしまう。

「うっわ、想像よりずっとエロい声出すんですね。その声だけで射精しそう…！」

「やっ！あっ！あっ！あっ！」

ヌコヌコヌコヌコ！と指が小刻みに奥を叩く。ヌルヌルをしっかりと塗り広げ、ぐっぱ～♡と指を開いて広げ、ぬるっと指が抜かれた。

つまり次は…。

しっかり抱き込んだまま軽々と腕の中で悠斗の身体を反転させ、少し膝を曲げて後ろの低い位置から腰を押し付ける。

ぬる……………っ♡

「アッ！い、いやだ、入れるなっ、やめろ！」

「あはは、でももう、先っぽ入ってますからね。貴方の力じゃ、俺が今からチンポ挿入するの、止められませんよね。ほら、こうやって、先っぽ入れたまま貴方の腰を掴んで、こう、ゆーっくり、引き寄せたら…どンドン、入ってく…………♡」

ミチ…♡ミチチチチチちちち…♡

「あ…っ…あ…っ…」

「ほーら、もうカリまでぬっぽり♡入っちゃいましたよ。頑張ってる逃げないと、太い竿がもっと入っていきますけど、ほら、ずぶずぶ、ずぶずぶ～…♡」

「あ、あ、あ、ああ、あ！！！！やだあ！！」

「あー入る入る入る…アルトさんに、一般リスナーのチンポ生ハメする…っ！」

グ、ぬぶぶぶぶぶぶ～～～っ♡♡♡

ズっっっっぶん♡♡♡

「ひは、あ……」

男の腰がびったり♡と尻に押しつけられ、根本の陰毛がサリサリと割れ目を擦る感触に、はくはくと息をついた。

本当にチンポ入ってる…。

内臓をミチミチに広げて入っている男の肉棒があまりにもデカすぎて、身じろぎもできない。今暴れたら、そこから体が避けてしまいそうだ。

震えながら耐えていたのに、確かめるようにゆさっ♡♡♡と軽く揺すられ、頭に星が飛んだ。

「～～～～～～～ツツツ！？！？！？」

ガクガク震える。男のガッチガチの性器が奥まで入ってる感覚が、ヤバい。無理矢理こじ開けられた入り口が反射的に閉じようとして、刺さり込んでいる硬いモノをぎゅうっ♡ぎゅうっ♡と食い締めてしまう。

「うわ、すごいナカ媚びてますよ♡ おまんこいっぱいチンポ頬張ってもぐもぐして、すごい。エロいですね、これからアルトさんの配信聞きたびに、この人にチンポハメたんだなあって思い出しちゃうなあ…」

ぬっ♡ぬっ♡ぬっ♡ぬっ♡ぬっ♡ぬっ♡
ぬっ♡ぬっ♡ぬっ♡ぬっ♡ぬっ♡ぬっ♡

ガクガクと震える足を引きずり立たせるように、後から男に腰をしっかりと持たれ、自宅の玄関で犯される。

尻を突き出した格好で、男がぐいっ♡と腰を突き上げるたび、少し足が浮いてしまう。その手を離させたくて両手で男の手首をつかんだが、足が浮くと前に倒れそうで怖くて、思わず逆にその手に縋ってしまった。

「ー…っ」

男の息が荒くなる。

一度、一際強く腰を叩きつけると、腰を掴んでいた両手が、悠斗の両手首を手綱のように握りなおした。

「あッ……」

そして、ぐっと引きながら、鍛え抜かれた逞しい腰を、全力で突き出す。

バツツツチュン♡♡♡！！

バチュッ♡！！バチュッ♡！！バチュッ♡！！

バチュッ♡！！バチュッ♡！！バチュッ♡！！

「オッ！？おっ♡アっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡
やっ♡やだっ♡こわいっ♡うぎゅっ♡うっ♡」

パンツツ♡！！パンツツ♡！！パンツツ♡！！

パンツツ♡！！パンツツ♡！！パンツツ♡！！

玄関に、運動不足の薄い尻肉にムチムチの筋肉を纏った鼠径部が叩きつけられるエグい音が響く。

「はっ、はっ、ね、アルトさんっ、俺、あの配信を聞いて、めちゃくちゃ興奮して、抜こうと思ったんですけどねっ、思い直して、溜めたんです！全部、貴方の中に、射精しようと思って！」

「あっ♡！？え、あ♡！？♡えっ！？♡やだっ！？♡」

バチュッ♡！！バチュッ♡！！バチュッ♡！！
バチュッ♡！！バチュッ♡！！バチュッ♡！！

「ね、だから、今から、すごく濃いので、出しますよっ♡！？濃すぎて、固形になってる、ようなやつをっ、貴方の、おまんこの、一番奥に出しますッ♡！！一滴も、逆流してこない、濃い精子♡！全部ッ中にッ受け止めてっくださいねッッッ♡！！！」

「ヒ、いやだッ♡！！やだやだやだやだっ♡！中出し駄目、だめ、だめエっっっ……♡♡♡」

パンッ♡！！パンッ♡！！パンッ♡！！パンッ♡！！

……パンッ♡！！……パンッ♡！！……パンッ♡！！

「嫌がってももう出ますからッ♡♡！！うッ、イク、イクッ、アルトさんの中でイクッ♡♡！！ドロッドロザーメン中に出すッ♡♡♡！！！」

「あっ…あ、ア、ああ…ッ…」

バツツツ……チュンツツツ♡♡♡！！！！

一番奥にガチガチの亀頭が叩き込まれ、男が歯を食いしばってブルブルッ…♡と雄々しく胴を震わせた。

ビキッ！ビキッ！と男性器が発射の予告のように跳ね、そして。

ビュルッ……

ブリュツツツ♡♡♡♡♡！！！！！！

ポビュッ♡ブポポッ♡ブッポォ♡♡！！

ビュル、ブリュリュリュリュリュ〜〜〜〜ツツ♡♡♡！！！！

射精というにはあまりにも大量で重く、もったりと濁った特濃な質量の音が、ブリュブリュと腹の奥に叩きつけられる感覚。

「えあ、ア、あ、アああ、うぐ、うっ……」

ただでさえガチガチすぎるチンポでミッチリと塞がれた雄膣が、さらに粘度の高い白濁を奥に押し込まれ、圧迫される。

容量を超えた質量で奥を埋め立てられる苦しさにかは、と口を開き、息を逃がすが、射精はまだ終わっていない。